オメップ世界大会〈チリ〉に参加して

―チリの子どもをとりまく環境―

近喰　晴子
冨田　久枝

サンチャゴにて

近喰　晴子

三年ごとに開かれるオメップ世界大会、今年は南米チリに於いて七月三十一日から八月四日の期間開催された。三十七か国九〇〇名がサンチャゴに集い、日本からは二十九名の会員が参加した。今大会の全体テーマは「質の高い教育環境で生活し、育ち、学ぶ子どもの権利」でこのテーマを中心に、研究者や幼児教育実践者が日頃の研究成果を発表した

り、世界の乳幼児保育の情報や動向に耳を傾けた。期間中、午前は講演やパネルディスカッション、午後は研究発表、夜はチャペルコンサートやパーティ等と盛りだくさんの内容が準備されていて、一日の大半をプログラムの元で過ごした。また、開会式に先立ち保育施設の見学も行われ、チリの保育事情を知る手掛かりを得た。

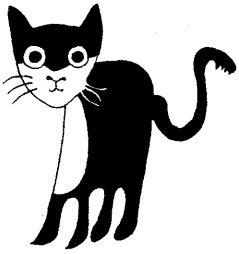
午前中の講演は、いずれも全体テーマに基づいて、質の高い教育環境とはどういう状態か、なぜ必要か、どのよう

▲参加国の国旗の元、熱心に耳を傾ける参加者

に評価すればよいか等の問題を、それぞれの講演者の立場から問題を投げかけて下さった。なかでも興味深い講演はＣＣＮＥ事務局長マリエン・ムラネット先生の講演で、生命倫理と教育との関係を脳生理学の観点から示唆に富んだお話をして下さった。

会場には展示コーナーも設けられていて、日本や開催国チリの外いくつかの国と協賛企業が、展示を通して大会に参加していた。チリの展示コーナーには独楽やあやとり、石蹴りなど私達にもなじみ深い遊びが紹介されていて、異なる文化圏で生活しながら、共通の児童文化財を持つことに驚いた。協賛企業の展示品から察すると、このような古典的な遊びのための玩具より、文字や数等に関心を持たせるための知育玩具がもてはやされているように感じた。有力な協賛企業である食品会社は、「我が社の栄養豊富な食品で健康な子どもに」と言わんばかりに、手軽さが売り物のサンプル品を配り、教材関連企業は「我が社の玩具で賢い子どもに」と積極的に自社製品をピーアールしていた。多くの国がそうであるように、チリに於いても、まず知的な教育環境を整えることの必要性が強調されているのではないかと思えた。

開催地サンチャゴ市セントロ地区の朝は、おびただしい量の個人バスが出す騒音と、灰



白色に立ちこめたスモッグにより始まる。ホテルの窓から見える町並みはスモッグに覆われ、アンデスの景観も霞んで見える。スモッグの主な原因は、決められた路線をより多く走らせるため、荒っぽい運転を繰り返す個人バスにある。急発進、急停車のたびに黒煙を撒き散らす。しかし、注意して見ると個人バスに混ざって多くの日本車も走っている。燃料や車の性能の問題もあると考えられるが、日本車も美しいこの街の大気汚染に荷担しているのだと思うと心が痛む。

町を歩いていると、街角や広場には物乞いをする母子、無心する子どもの姿をよく見かけられた。経済不況により職を失った近隣の人たちが、比較的豊かなサンチャゴに職を求めてやって来たが、職が得られなかった人たちが多いのだという。しかし、物価の安いこの国の自慢は、食べ物さえ選ばなければ誰も餓死することはないことなのだそうである。閉会式に出席されたチリ文部大臣の話の中に、「チリはまだまだ発展途上にある国で、貧富の差が大きい。この貧富の差が幼児教育を受ける機会を不平等なものにしている。またその後の学校教育に於いてもその差が歴然と現れている」とあった。そう言えばオメッププログラムで見学したモンテッソーリ幼稚園は、誰もが自由に入園できる施設というより収入も多く恵まれた一部の家庭の子どもののように感じられた。ヨーロッパから移住した子孫が多く残るチリは、インディオへの差別も根強く残り、これも幼児教育の機会を不

平等なものにしている。

大気汚染とオゾンホールに悩ませられる町、この町で「質の高い教育環境を子どもたちへ」、というスローガンにより開かれたオメップ世界大会、開催地チリの子どもたちにとって、より豊かな教育環境と権利が得られるきっかけとなることを祈念する。

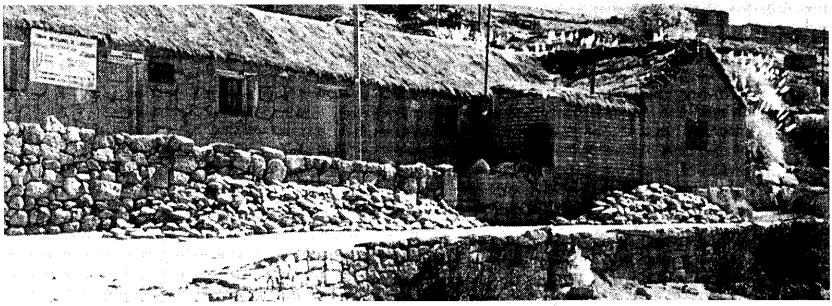
イースター島にて

冨田　久枝

スモッグの町サンチャゴを後にし、オメップのメンバーは幾つかのグループに分かれた。日本に帰ったグループ、サンチャゴに残った人々、アタカマ砂漠のツアーに参加するグループ、そして私を含めた六人がイースタ島に向け出発した。ランチリ航空でおよそ六時間の道のりです。時差は一時間。憧れのイースタ島に着いたのは夕刻、確か七時頃だったと思う。イースタ島に飛ぶ飛行機には、イースタ島を経由してタヒチに行く人が七割ぐらい搭乗していて、イースタ島に宿泊する客は少なく、到着と同時にやや心細さを覚えた。しかし、日本人スタッフの増田さんが快く迎えてくれ、我々一行は無事にホテルに辿

り着くことができた。ホテルは、沖縄などにあるリゾートホテルを思わせるつくりで、平屋の客室がコの字型に並び、中央の庭にプールがあった。しかし、イースタ島はちょうど雨季（冬から秋）という気候で、リゾート気分という訳にはいかなかった。

翌日は、朝から雨が降り、予定していた島内観光のツアーが中止になってしまった。そこで、イースタ島の中心部を散策することになった。イースタ島は、大きさから言っても、景観から言っても、北海道にある礼文島に良く似た島で足で散策するにはちょうど良い島である。そして、島には信号は勿論、コンクリートで舗装された道路はない。昔の田



▲インディオの村　ロバを引いたお婆さんがあらわれたりして絵のようでした。でも、小さな集落の小学校にはパラボナ・アンテナが設置されサンチャゴ直送の「現代」が運ばれています（アタカマ砂漠のツアー）。

舎道を歩いている。そんな錯覚に陥る風景である。また、植物がほとんどと言っていいほど沖縄にそっくりなのである。ホテルでもらった地図と格闘しながら、町の中心部まで散歩し、郵便局で切手を買ったり、市場を覗いたり、すると学校らしい建物が目に止まった。少しでも見学出来ればと思い、なんのアポもなしに、学校で見学を交渉してみたところ、いとも簡単に見学することができ、さらに数日後幼稚園の子どもたちとの時間を作ってくれる約束まで

▲日本企業の援助により復元されたモアイ像

もらったのである。なんとラッキーなことか。

イースタ島での二日目はすばらしい快晴となった。いよいよイースタ島のモアイに会える。胸が高まった。マイクロバスには私たち日本人六人とオーストラリアからのカップルが乗った。イースタ島の景色は荒涼とした大木ひとつ無い丘が続き、海は紺碧、その海岸線は溶岩が流れ出したまま凝固した、ごつごつした浅間山の鬼押し出しのような海岸線が続き、その海岸線にそってモアイは自分の島を見守るように、島の方を向いて立っていた。当時の争いで海岸線に立っているモアイは数えるほどしかなく、殆どが倒され、目をくり抜かれ海辺に転がっている。最近注目された十五体のモアイでさえ、立ち上げられて数年しか経っていない。ほとんどのモアイはまだ当時のままなのである。モアイを切り出した山にも登った。切り出し途中のまま山に埋もれているモアイが点在していた。その光景をみると、人間の飽くなき戦い、そして滅びていった人々の悲しみや苦しみ、そして空しさが伝わってくる。また、イースタ島では、モアイの文化が滅びた後、鳥人伝説の島となる。各部落が年に一度その利権を争うお祭りが行われ、そこで勝利した部落のリーダーが鳥人として一年間すべての権限をもつというものである。その行事がおこなわれた場所にも行った。南極からの冷たい風の吹きすさぶ、断崖でその行事は行われ、どれだけの人々の命が失われたことか。絶海の孤島の自然とともに生きていくには、そのようなシン

ボルや神聖な力が必要だったのかもしれない。

楽しみにしていた幼稚園の訪問の日がやってきた。手土産を何も用意していなかったので、みんなで折鶴を作り持参した。私たちを歓迎するために、子どもたちそして先生方は年に一度のお祭りの衣装（羽根や葦で作った腰みの）をつけポリネシアの民謡に似た音楽に合わせダンスを披露してくれ、私たちも一緒になって踊った。このダンスの特徴はあやとりをしながら踊ることである。日本の裏側

▲イースター島にただ一つの幼稚園の子どもたち

の、絶海の孤島であやとりである。校庭で遊んでいた小学生はビー玉ぶつけをしていた。なんと不思議なことか。保育内容は知育を目的としたものが多く、チリと同様であった。しかし、驚いたのは殆どの子どもがポケモンを知っていた。日本のアニメがこんなところにまで影響しているとは。

もうひとつ是非紹介したいのは、イースタ島の暮らしである。島に住む動物は争うことも無く、犬、猫、鶏、牛、羊、馬がほとんど柵なしに自由に村を歩いている。人間を含めた動物が共存しているのである。このような光景が残っている地域がどれほどあるのか。文明の発達が生み出すものは何なのであろうか。イースタ島で得たものは、私も自然の一部に過ぎないといった感覚かもしれない。

近喰（和泉短期大学）
冨田（東京福祉大学）